様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　６月２２日現在

機関番号：３２６８５
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：２００８　～　２０１０
課題番号：２０７２０１０４
研究課題名（和文）　インドネシア国スラウェシ島における絶滅危機言語の記述及び多言語併用状態の分析
研究課題名（英文）　Description of endangered languages and multilingual situation in Sulawesi island, Indonesia.

研究代表者
内海　敦子（UTSUMI　ATSUKO）
明星大学・人文学部・講師
研究者番号：７０４３１８８０

研究成果の概要（和文）：大きく分けて次の四項目について研究を行った。第一にインドネシアにおける、オーストロネシア語族の言語で絶滅の危機に瀕した少数民族の言語を調査し、記述・分析すること分析した。第二に活力が失われ絶滅に瀕した言語が示す特徴を記述・分析した。第三に類型論的な視点からスラウェシ島の諸言語が示す統語論体系の移り変わりを分析した。第四に少数民族の人々が置かれている社会言語学的状況をアンケート調査により考察した。

研究成果の概要（英文）：The research was done in the following four fields.　First, minority languages in Indonesia, which belong to Austronesian family, are described and analyzed. These languages are severely endangered.　Second, features which are observed in languages which undergoes language shift are described and analyzed.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総　計	2,800,000	840,000	3,640,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：言語学・言語学
キーワード：オーストロネシア語族、スラウェシ北部の言語、記述言語学、危機言語、多言語社会、社会言語学

１．研究開始当初の背景

インドネシアには700を超える言語が存在するが、スラウェシ島の北部州には 11 の少数民族言語があり、ほとんどの言語が記述不十分である。しかし、若い世代への民族語の伝達がされておらず、このままいくと数十年後には消滅する危険がある。

２．研究の目的

(1) 第一に、Bantik 語、Talaud 語といった記述の不十分な言語の現地調査を行い、信頼に足るデータを収集する。そして、分析・研究の結果を辞書・文法書にまとめることを最終的な目的に据えつつ、随時論文として結果を公表していくことである。また、その他のミナハサ諸語に関して文献の収集を終え、次に調査対象とする Tonsawan 語について、現地で先行調査を行い、調査協力者を確保し

た。

(2) 第二に、Bantik と Talaud に加え、他の研究者がデータを収集した Ratahan と先行文献が多い Sangir 語の四つのサギル諸語を比較することである。

(3) 第三に、各言語が話されている地域で、インドネシア語マナド方言と少数民族言語がどのような使用範囲を持っているか、またそれぞれの言語に関するイメージなどを調査し、社会言語学的な考察を行うことである。

３．研究の方法

(1) 第一の目的に関しては、それぞれの民族語の話されている地域で現地調査を行った。

①Bantik 語に関しては、北スラウェシ州の州都マナド市周辺の村々、特に Buha 村と Bengkol 村を現地調査地域とし、調査協力者と面談して言語調査を行う。

②Talaud 語に関してはタラウド諸島の Salibabu 島の中心地、Lirung 市に赴いて、調査協力者との面談を通じて言語調査を行った。

③それらの現地調査を経て得たデータを整理し、分析して論文にまとめた。

(2) 第二の目的に関しては、北スラウェシ州の図書館や大学などの施設で資料収集を行った。また、それぞれの言語が話されている地域を回って、言語が話されている実態を調べ、調査協力者を探した。その後、収集した資料を比較し、今後の歴史比較言語学的研究の基礎を固めた。

(3) 第三の目的に関しては、社会言語学的な調査票を作成し、Bantik 語、Talaud 語、Tonsawang 語の三つの民族語の話者を 30 人から 85 人を対象に、アンケートの回答を依頼した。その結果を集計し、民族語の話者の言語使用実態を調査した。

４．研究成果

(1) 第一の目的の成果について述べる。

①Bantik 語については平成 20 年度から 22 年度にかけて、三回の現地調査を行った。これらの調査で得た多くの民話の語りや自然な会話の録音データと、映像データをできるだけ文字データに起こし、記録として完成させるよう努めた。Bantik 語に関しては、芸能に関するデータも集めることができた。労働をしながら歌う歌、祭りの時に歌う歌が採集でき、踊りながら歌う姿は映像データとして収録した。

そのほか、Bantik 族と Talaud 族の葬式などの儀式においてどのような言語使用実態があるかを映像データとして収集できた。

また、談話データの分析を続行し、Bantik 語の文章に混入するインドネシア語の語彙がどのようなものであるかの分析を行い、インドネシア語の談話との相違点について考察した。また、方向をあらわす表現(directional)が多彩であるので、その追跡調査を行い、論文にまとめた。

②Talaud 語に関しては音声・音韻のデータを再度分析しなおし、アクセント体系についての分析を行った。現地調査では、統語論とテンス・アスペクト体系などに関して、深い分析に耐えうるデータの収集を行った。

③Bantik と Talaud に加え、他の研究者がデータを収集した Ratahan と先行文献が多い Sangir 語の四つのサギル諸語を比較する作業を続行した。また、ミナハサ諸語に関しては文献の収集を終え、次に調査対象とする Tonsawan 語について、現地で先行調査を行い、調査協力者を確保した。また、22 年度には本格的な調査を開始し、2000 語の基礎語彙を収集し、併せてそれらの単語の音声データおよび Tonsawang 族の居住環境や文化についての談話データを収集した。

(2) 第二の目的である、サギル諸語とミナハサ諸語の比較について述べる。サギル諸語には、Bantik 語と Talaud 語のほかに Ratahan 語、Sangir 語、Sangil 語の資料を集めたが、それぞれの言語についての資料は十分とは言いがたかった。Ratahan 語については大まかではあるが信頼にたる文法記述がある。Sangir 語については音声の分析をはじめ、民話などを Sangir 語の正書法で書いた資料がある。そのほか、聖書も翻訳されている。

ミナハサ諸語のデータは、基礎的な文法記述はあるが、十分に詳しい記述はないといってよい。ただし、近年、Universitas Kristen Indonesia Tomohon 大学の民族語プロジェクトグループが聖書の部分訳を各言語で出版しているので、それらの聖書部分訳を収集した。このときには、それぞれの正書法を定めていることがわかった。

(3) 第三の目的の成果について述べる。

①平成 20 年には各言語が話されている地域で、インドネシア語マナド方言と少数民族言語がどのような使用範囲を持っているか、またそれぞれの言語に関するイメージなどを調査し、社会言語学的な考察を行った。Bantik 語と Talaud 語話者のそれぞれ 50～60 代の男女と、20 代～30 代の話者に調査表を記入してもらい、言語使用域および、単語

やインドネシア語から民族語への翻訳をお願いし、言語能力をはかった。
平成 21 年から 22 年にかけて、社会言語学的調査を改良し、より多くの人々に記入してもらった。Tonsawang 語では 30 人から回答を得たが、Bantik 語と Talaud 語に関しては 80 名前後の回答を得たので、この種のアンケートとしてはまずまずの数量となった。

②これらの社会言語学的調査の結果、北スラウェシ州においては、各市町村で観察されるように、若い世代への民族語の伝達がなされていないことが証明された。
高齢の世代は、親・兄弟や配偶者と民族語を主に用いて話しているが、若い世代になればなるほど、家庭内でも民族語を使用しなくなる。その代わりに、インドネシア語のマナド方言を使用する。
高齢の世代は、自分とは異なる民族と話す時にインドネシア語マナド方言を用いてきたが、マナド方言に関しては有益なコミュニケーションの道具ではあるものの、その威信は高くないと考える傾向がある。しかし、若い世代は、マナド方言の威信をより高いと考える傾向にある。それは、祈りのときに使用する言語として、高齢の世代がインドネシア語の標準変種を用いるところ、若い世代はマナド方言を多用する傾向があることからも推測できる。
しかし、高齢の世代も若い世代も、フォーマルで公的な場においては、インドネシア語標準変種を用いるし、正式な文書や学校教育で作成する文章にはインドネシア語標準変種を用いる。ただし、近年の注目すべき書き言葉としては、ＳＭＳ（携帯電話による短文メッセージ送信）に代表される簡略化したインドネシア語の口語表現をもとにしたものが注目される。これらの民族語話者も口語表現を簡略化した独特のインドネシア語を用いており、これが彼らの言語感覚と言語使用にそれなりの影響を及ぼしていることが推察できる。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計５件）

①内海敦子、「タラウド語使用地域の言語使用と言語実態－インドネシア国、北スラウェシ州における民族語使用実態－」、『明星大学研究紀要－日本文化学部－言語文化学科』、査読無し、2010、pp217-234

②内海敦子、「インドネシアにおける地域語・民族語の使用実態－バンティック語の事例を中心に－」、『明星大学研究紀要－日本文化学部－言語文化学科』、第十八号、査読無し、2010、pp205-234

③内海敦子、「バンティック語のアクセント」、『東京大学言語学論集』、29 号、査読有り、2010 年、pp269-304

④Atsuko UTSUMI、‘The Deictic System in the Bantik Language’、Proceedings of the Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium、Vol.1、査読無し、2009、pp213-229

⑤内海敦子、「消滅に瀕した Bantik 語の姿―多言語状態と言語変化―」、『言語研究』、日本言語学会学会誌、査読有り、134 号、2008、pp57-84

〔学会発表〕（計１３件）

①Atsuko Utsumi、‘The System of Tense and Aspect in the Bantik Language’インドネシア諸語の記述的研究 2010 年度第２回国際ワークショップ、2011 年 2 月 17 日、東京、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

②内海敦子、「サギル諸語の reduplication－バンティック語の事例を中心に－」、インドネシア諸語の記述的研究 2010 年度第４回研究会、2010 年 10 月 10 日、東京、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

③内海敦子、「タラウド語の conveyance voice の意味と用法」、インドネシア諸語の記述的研究 2010 年度第１回研究会、2010 年 6 月 15 日、東京、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

④ Atsuko Utsumi、‘Applicative Construction in the Bantik Language: Descriptive and Typological Discussion’、The 20th Anniversary Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2010 年 6 月 10 日、University of Zurich, Switzerland

⑤ Atsuko Utsumi、‘Sociolinguistic Situation of Manado-Malay in comparison with the indigenous languages in North Sulawesi’、The 14th International Symposium on Malay-Indonesian Languages、2010 年 4 月 30 日、University of Minnesota, USA

⑥Atsuko Utsumi、`The Directional Terms in the Bantik Language’、言語ダイナミクス科学研究プロジェクト Descriptive Studies on Indonesian Languages 第二回研究会、2009 年 12 月 1 日、東京、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

⑦内海敦子、「バンティック語の名詞に関するケースマーカーと携帯統語論」、言語ダイナミクス科学研究プロジェクト Descriptive Studies on Indonesian Languages 第一回研究会、2009 年 9 月 12 日、東京、東京外国語大学アジアアフリカ言語文化研究所

⑧内海敦子、「多言語社会：北スラウェシ州の状況」、第四回ＡＡ研共同研究『多言語状況の比較研究』、2009 年 7 月 11 日、東京、東京大学アジアアフリカ言語文化研究所

⑨Atsuko Utsumi、`Semantic Roles and the Voice Systems of Sangiric Languages’、11th International Conference on Austronesian Languages’、2009 年 6 月 25 日、Centre Paul Langevin、Aussoris, France

⑩Atsuko Utsumi、`Reinterpretation of a Morpho-syntactic System as a Result of Language Contact and Language Attrition: An Example from an Endangered Language in Indonesia’、International Symposium: Morphology in Determining Morphosyntactic Change: Case Studies and Cross-linguistic Applications、2009 年 3 月 5 日、大阪、国立民族博物館

⑪内海敦子、「バンティック語の applicative construction と applicative verbs」、世界の諸言語における態（voice）の類型論的研究研究会、2009 年 1 月 24 日、大阪、国立民族博物館

⑫Atsuko UTSUMI、`Problems Encountered in the Reserarch of the Voice System in an endangered language’、18th International Congress of Linguitsts、2008 年 7 月 22 日、韓国ソウル市、高麗大学

⑬Atsuko UTSUMI、The Deictic System in the Bantik Language、Chulalongkorn-Japan Linguistics Symposium、2008 年 5 月 1 日、タイ国チュラロンコン大学

６．研究組織

(1)研究代表者

内海　敦子（UTSUMI　ATSUKO）

明星大学・人文学部・講師

研究者番号：７０４３１８８０

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし